

「軍旗」それは神だった

荒木 肇

あしびきの

山辺とよもすつつの火の
煙のうちにいちじるく

さおえる旗はかしこきや

わが大君の御手ずから

授けたまえる御軍の

しるしの旗ぞわがともの

軍の神ぞわがともの

軍の神と仰ぎつつ

進めや進めますらおのとも

(「雄叫」、偕行社、1993年、36頁)

軍旗に対する敬礼に際して必ず吹奏された喇叭譜「足曳き」。その歌唱曲につけられた歌詞です。この「喇叭譜」は1885(明治18)年に出された「陸海軍喇叭譜」221曲中の一つです。作曲は陸軍1等軍楽長古矢弘政となっています。当時は陸軍軍楽隊も人員も少なく、最高官等も1等軍楽長、少尉相当官でした。古矢軍楽長はフランスに留学した人で、多くの喇叭曲を作っています。

▲軍旗の起こりは錦旗にある

1933(昭和8)年の陸軍教育総監部編纂の『精神教育資料』には、次のような記述があります。古来よりご親征があった場合は錦旗を陣頭に掲げた。臣下に征討を命じる時には錦旗あるいは節刀を賜った。その戦役中の兵馬の掌握、生殺与奪の権を委任された。この錦旗こそが軍旗の元であると解説しています。

多くの歴史書には錦旗や節刀の下の賜が多くあったことが記されています。その旧例にのっとり、1868(明治元)年1月4日には近畿地方の旧幕府兵追討のために出征された東伏見宮嘉彰親王に錦旗・節刀が下されました。

また東征大総督になられた有栖川宮熾仁親王も錦旗・節刀を賜ります。有名な「宮さん宮さんお馬の前に ヒラヒラするのはなんじゃいな」の進軍歌の元になったのがその錦旗です。錦旗とはまさに天皇の軍隊、官軍であることのシルシでした。

▲駒場野にて

1870(明治3)年4月17日、いまの目黒区駒場にあった練兵場で

「聯隊」を集めた演習が行われます。まだ藩置県が行われていない時です。企画・運営にあたったのはときの兵部省ですが、各藩の常備軍にはそれぞれ違いがありました。

薩摩藩軍は英国式、他にも藩軍ごとに仏・独・蘭といった各国軍隊の操典をそのまま学んでいたのです。陛下をご覧になりますから藩軍それぞれの旗章をそのままにするわけもいかず、10旒の聯隊旗と16旒の大隊旗が渡されました。この聯隊旗は後のデザインと同じく、日章を中心にして16条の光を出したもので縦4尺4寸(約130センチ)、横5尺(約150センチ)というものでした。神道学の専門家の大原康男氏によれば、日章を中心にして放射状の光芒を添えたものは「日足」といつて古くから家紋の中にもあるそうです。

▲軍旗は仏蘭西式で

わが陸軍は建軍当初、フランス軍の影響を大きく受けていました。普仏戦争(1871年)に敗れるまでは世界最強の陸軍国でした。徳川幕府の陸軍もナポレオン3世の協力でフランス式になりました。

幕府が減んだ後でも、静岡藩の沼

津兵学校(徳川軍の士官学校)ではフランス式の水準が高い教育がされてきました。この私設士官学校出身の工兵、砲兵将校の中には日清・日露戦争で活躍した人も多くいたぐらいです。

幕府陸軍の軍旗は日章旗でした。その絵も残っていますが、竿頭には徳川家の家紋である三つ葉葵が三方に向けられています。これはナポレオン軍の鷲章がついた軍旗と同じです。そうしてフランス軍の旗の周囲には立派な総がついていました。

日本陸軍の軍旗にも総がありました。そして竿頭には菊のご紋章が三方に向けられています。このデザインや様式はどうやら1873(明治6)年の山県有朋陸軍卿の右大臣岩倉具視への書簡にある「仏蘭西式に依って調査したもの」から始まったと見るべきでしょう。

軍旗こそ天皇の軍隊の象徴だ、いや国家紋章の意味だろうという議論が以前はありました。しかし、後にある明治陛下の勅語から拝察すると、国家の印なのだという説に首肯できます。今でも、旅券(パスポート)には菊のご紋章が付いています。その議論は、天皇の私兵だ、帝国主義

の軍隊だったというイメージが後世に作られたおかげではありませんか。

また授与にあたっては、陛下自ら武官に手渡すといったところが過去にはなかったことでした。それがフランス式だと大原氏も指摘された通りです。錦旗、節刀の場合には陛下が直に將軍に手渡すことはありませんでした。

近代陸軍になってから、軍旗を陛下が直に聯隊長に手渡すようになりました。これこそがフランス皇帝が自ら聯隊長に渡すことにならった「仏蘭西式」の一つではないでしょうか。

▲軍旗親授の式

1874（明治7）年1月23日、いまは日比谷公園になっている日比谷操練場で初めて軍旗授与式が行われました。

近衛歩兵第1聯隊と同2聯隊が整列し、明治大帝が壇上の玉座に臨まれます。坊城式部頭が軍旗を奉じています。

第1聯隊長が式部官に先導されて

壇の前に進み、停止しました。壇上の親王方や侍従長や陸軍卿以下の高官も壇を降り左右に侍立します。す

ると陛下も壇を降りられ勅語を下されました。

「近衛歩兵第一聯隊編成ルヲ告ク仍テ今軍旗一旒ヲ授ク汝軍人等協方同心シテ益威武ヲ宣揚シ以テ国家ヲ保護セヨ」

そうして式部頭のもつ軍旗をとられて、手ずから聯隊長に授けられました。聯隊長はただちに次の通り奉答します。

「敬テ明勅ヲ奉ズ 臣等死力ヲ竭シ誓テ国家ヲ保護セン」

第1聯隊長は御前を退いて、すぐ後ろに従う旗手に軍旗を渡ししました。続いて第2聯隊にも同じ手順で軍旗が授けられます。この後、各部隊は軍旗に対して敬礼を行い、合せて喇叭が吹奏され、部隊は分列行進を行いました。

「國家を保護せよ」と陛下が言われ、奉答にも同じ言葉が使われました。後に勅語は「國家」から「我帝國」に変わり、「編成ルヲ告ク」から「何聯隊ノ為」となりました。こうしたことから天皇の私兵という解釈には無理があると思います。

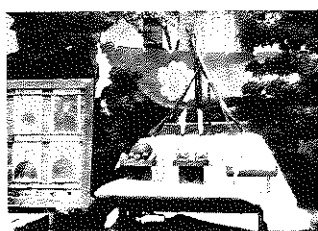
なお、軍旗が正式に制定されたのは同年12月2日のことでした。このときの太政官布告には砲兵聯隊にも

授与する予定とありますが、1885（明治18）年1月10日に近衛砲兵聯隊が初めて編成されるにあたって、砲兵には軍旗を賜らないことになりました。おそらく歩兵と騎兵は直接戦闘兵科であり、砲兵は後方から支援する兵科ということからでしょう。



軍旗下賜・日比谷

▲祭壇の上の軍旗
軍旗祭という行事がありました。各聯隊で軍旗が親授された記念日を祝ったものです。



歩兵第18聯隊（豊橋）軍旗祭壇

兵営も一般公開されて、近隣住民はもとより兵卒たちの家族も集まってきました。中隊ごとの仮装大会や運動会、さまざまな催し物があり、楽しかったという経験者の思い出がよく聞かれました。調べてみると、明治20年代（1890年頃）から始まったようです。

写真を見れば驚くべきことに、軍旗は奉安所の壇上に飾られています。周りは幕で囲まれて注連縄を張り、御神酒、餅や山海の幸が飾られていました。この軍旗への御供物は民間からも多く捧げられたことが記録にあります。

いまの自衛隊でも創立記念日などでは、地域の皆さんに駐屯地を開放しています。分列行進や式典を行い、楽しく一日を過ごす習慣があります。さすがに連隊旗に御供物を捧げて拝礼することはありませんが、昔の人は陛下の分身である軍旗には神聖なものを感じていたのです。近代化を推進した陸軍も、むしろそうした地域の土俗的な感覚を大切にしたいといった伝統がありました。

（引用・参考文献、『帝国陸海軍の光と影 一つの日本文化論として』大原康男、2005年、展転社）